

方丈記 鴨長明

行く河のながれは絶えずして、しかも本の水にみならず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中にむねをならべいらかをあらそへる、高き賤しき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中

に、わづかにひとりふたりなり。あしたに  
死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡  
にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、  
いづかたより來りて、いづかたへか去る。  
又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を惱  
まし、何によりてか目をよるこばしむる。  
そのあるじとすみかと、無常をあらそふさ  
ま、いはゞ朝顔の露にことならず。或は露  
おちて花のこれり。のこるといへども朝日  
に枯れぬ。或は花しぼみて、露なほ消え  
ず。消えずといへども、ゆふべを待つこと  
なし。

※テキストは、インターネット上の図書

「青空文庫」をもとにして加工しました。